

プリンセス狂想曲

外伝

お風呂で王妃とイチャイチャ編

筆祭競介

表紙イラスト：里海ひなこ



試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された『プリンセス狂想曲外伝 お風呂で王妃とイチャイチャ編』に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリーム文庫『プリンセス狂想曲 ロイヤルウエディング』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



プリンセス狂想曲

外伝

※お風呂で王妃とイチャイチャ編※

筆祭競介
表紙 / 里海ひなこ

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

フィン

父と兄たちの急死により大国バトルベルンを統治することになった少年王。年齢相応に性に興味津々の男の子。

かぐや 香虞夜

フィンの許嫁として長く文通をしてきたヤマト国の王女。現在は北王妃として入宮している。

エルダ

先代バトルベルン王の愛妾。後宮長としてフィンと王妃達との仲を取り持っている。

大陸の西全土を統べる大国・バトルベルン王国。

すでに治世は三百年を超え、現在もその権勢に揺るぎはない。

現国王のフィンゼルラインはまだ年若いにもかかわらず、見事にこの大国の王座を維持していた。戦場に出れば初陣で南国の大軍を撃ち破り、国を治めては前国王時代に末期的だった軍と教会の仲を改善させはじめている。対外的にも東の大国・大華皇国との外交を常に優位に進め、貧困に喘ぐ北の諸国には人道的な支援を欠かさない。

バトルベルン国王フィンゼルライン——フィンの名君ぶりは既に大陸全土に響き渡っていた。

※

バトルベルン王家に仕える後宮長・エルダの部屋に、王妃の一人がやってきたのは日も暮れた遅い時刻であった。

現在、フィン国王には四人の妻がいる。

東の大国・大華皇国の元第一皇女、東王妃の玲爛れいらん。

西国教会大司教の娘、西王妃のリオネッセ。

バトルベルン王国大將軍の娘、南王妃のゼシデリカ。

そして今、エルダの目の前にいる北王妃の香虞夜かぐやである。

後宮長が椅子を進めると、彼女は気品の滲にじむ優雅な物腰で一礼し物静かに腰掛けた。エ

ルダも向いの椅子に座り、姿勢よくこちらを見ている王妃と正対する。

——香虞夜様は陛下と結婚されてから益々美しくなれている。

表情にこそ出さないが、内心その美しさに感嘆の溜め息が漏れてしまう。王と結婚する以前からその透明感のある美貌には目を見張るものがあつたが、姫から王妃となつて以降その佇まいには、大国王妃の威厳と共に艶つぽさまで漂いはじめている。

「お忙しい中、私のためにお時間をとつて頂き、本当にありがとうございます」

香虞夜はそういうと、王妃という立場にもかかわらずエルダに対して深く頭を下げた。

彼女は謙虚な国民性で有名な大陸の北にある小国の一つ、ヤマト国の元プリンセスである。艶のある黒髪と雪のように白い肌は北国人特有のもので、中でも彼女の美しさは群を抜いていた。黒真珠のような瞳と、きゅつと引き結ばれた桜色の口許からは凛とした意思の強さが感じられ、この王妃がただ美しいだけの女ではないことが伺える。

装いもまた優美である。着ている服はヤマト国の民族衣装『ジュウニヒトエ』と呼ばれるもので、このヤマトナデシコの美しさをより一層引き立てていた。

「それで今日は、どういったご相談で？」

エルダの問いに香虞夜の白い頬がほんのりと桜色に染まった。長い睫毛を軽く伏せて恥かしそうに顔を傾ける。王妃としての威厳を身に纏いはじめている美女が垣間見せるその初々しい表情に、女であるエルダですら心が引き込まれてしまいそうだ。

「……………どうか……………今からお話しすることは……………内密にお願いいたします」

香虞夜がこのように念を押すのは大変珍しいことだった。そもそも他人に聞かれて困るようなことを口にするような人ではない。

「はい。心得ています」

エルダが真剣な表情で頷いても黒髪の王妃の口は重かった。姿勢よく椅子に座りキチッと揃えた両膝の上で、重ね合わせている両手をモジモジさせている。

「じ、実は……………」

もじもじもじもじ——。

エルダは、はい、とこたえ相手が喋りやすいように表情を和らげた。しかし香虞夜は緊張した表情を崩そうとしない。辛抱強く続く言葉を待った。

「……………フィン様との……………ことなのですが」

北王妃はそれだけという上目遣いでチラリとこちらに視線を向けてきた。黒真珠のように美しい瞳が涙で濡れたように光り、桜色に染まった頬とあいまって、女のエルダですら息を呑むほどの壮絶な美しさを放っている。

——この方は……………自分の容姿や仕草がどれほど見る者の心を揺さぶるのか分かっているのだらうか……………。

折を見てその辺りのことを教えてさし上げなければならぬと改めて実感した。

この美しさは傾国の美である。

しかし、それは今後の話だ。まずは直面している問題を解決しなくてはならない。

「陛下が何か香虞夜様のお心を乱すようなことをされるのですか？」

黒髪の王妃は曖昧に首を振った。その仕草も表情もイエスともノーともとれる微妙なものだった。

「そ、そういうわけでも……で、でも、あ、あの……フィン様が……あ、あの……」

万事物事の道理をよくわきまえている聡明な王妃がこれほど言いよどむのだ。表向きのことではあるまい。恐らく夜——男女の間でのことであろう。

あの心優しい少年王でも、この王妃のあまりの美しさに理性を乱され、アブノーマルな行為を強要しているのかもしれない。しかも心底、フィンに惚れている彼女がわざわざ自分の所に相談にくるぐらいなのだ。よほどの内容に違いない。

——これは……心して聞かなければいけないわね……。

どれほど強烈な告白をされても冷静な表情を崩さないように心積もりをする。

「ね、聞きでの……ことなのですが……」

口の重かったヤマトナデシコがいよいよ核心を語ろうとしている。『ネヤ』と聞いてやはりと思った。エルダは知らず知らずの内に身を乗り出し、ゴクリ、と生唾を飲み込んだ。香虞夜はやつと意を決したのか、それまで伏せ気味だった顔を上げる。

「フィン様が……私と……普通のセックスしかしてくれないのです」

「……………は？」

啞然とした。冷静な表情を崩さないように心構えをしていたのだが、ポカンと口をあけてしまう。目の前では生真面目なヤマトナデシコが真剣この上ない表情でこちらを見ていた。どうやら自分をからかっているわけではなさそうだ。

「あ、あの……香虞夜様……、その、そのどこに問題が？」

エルダの素朴な質問に、黒髪の王妃はやつと気持ち吹っ切れたようで詳細を語りはじめた。

「先日、他の王妃の方たちと皆でお話したときに知ったのですが……。フィン様は他の方たちとは聞いていろいろと楽しんでるそうなのです。見事な足の玲爛様とは……。足の裏や指を巧みに使って男性をなぶつっていたり、あの艶かしい太腿と戯れて果てたりするそうです」

「……は、はあ」

「胸がご立派なりオネツセ様とは夜を共にすれば必ず一度はあの胸で挟んで頂き、その谷間で果てるそうなのです。多い時だと四回も五回もするそうなのです」

「……そ、それは、それは」

「初恋相手のゼシデリカ様にいたっては、その当時のお召し物——一緒に剣術を習ってい

た頃の練習服をわざわざフィン様自らが特注で用意されて、それをゼシデリカ様に着せて着衣のまま何度も愛でるといふことです。ゼシデリカ様に木刀を持たせ、えいえいえやあやあと素振りをさせながら、フィン様がいろいろとエツちな悪戯をしたりするそうなのです。昔の思い出の場面を台本にして、それをゼシデリカ様に読ませながら行為に及ぶこともあるそうなのです」

何やら内容が危なくなってきた。

「あ、あの……か、香虞夜様の御心労は……だいたいわかりました」

思わずそう返事をしてしまったが、本当にわかっていたのだろうか。口許が引きつるのを抑えるのに精一杯で頭がよく回らない。他の王妃たちから相談を受けるのならわかるのだが……。

「ありがとうございますエルダ様。このようなこと、エルダ様にしかご相談できません」
黒髪の王妃はそういうと、切羽詰った表情で身体を大きく乗り出しこちらの両手をガツチリと握り締めてきた。その勢いに圧倒されてエルダは思わず上半身を後退させる。

「あ、あの……そ、それで……私にどうしろと？」

国王陛下に、今度北王妃とベッドを共にするときは彼女との思い出を刺激するような服を着せて寵愛するように、と進言すればいいのだろうか。

「私に、陛下に喜んで頂ける術を教えて頂きたいのです」

エルダの疑問に香虞夜は間髪入れずに即答した。どうやらそれが本題だったらしい。

「私は北国育ちの田舎者……。どのようにすれば殿方に喜んでいただけるのかさっぱり分かりません。聡明な他の王妃の方々に比べ、勘も悪く聞でのご奉仕が下手なため、陛下も私にはそのような高度な奉仕をお求めにならないのです。……私は文字通りお情けを頂いているだけで……。しぶしぶ抱いてくださるだけなのでしよう……」

「い、いや……。香虞夜様……。そ、そのようなことは……」

エルダの手を掴んでいる両手をグッと握り、それを悔しそうに見ている香虞夜をなんとか励まそうと身を乗り出す。彼女は明らかに誤解している。フィンが香虞夜を『しぶしぶ』抱いているなどということはありえない。自分が見た限り少年王も彼女と同じくらいこの王妃に惚れている。

「しかしエルダ様っ！」

「は、はい」

突然、顔を上げて何かを決意したような北王妃の迫力に、後宮長は続けようとした言葉を呑み込み仰け反った。

「それでも私はフィン様を思う気持ちだけは誰にも負けていません！ 私も皆様のようにフィン様に楽しんで頂きたい！ 気持ち良くなつて頂きたい！ もっともっと尽くしたいのです！ エルダ様、どうかお願いです。私につ、こんな私でも殿方に喜んで頂

ける技をどうかご教授ください!!」

いまにも土下座せんばかりの勢いで、普段めつたに大きな声を出さないヤマトナデシコが目の前で叫んでいる。

「……わ、わかりました」

北王妃のあまりの情熱に圧倒されて、無意識のうちに頷いてしまった。

国政の最前線で大陸の命運を左右するような交渉をしているバトルベルン王家の後宮長が、まともな思考を忘れて思わず頷いてしまうほど香虞夜の訴えは強烈であった。

フィンは王宮にある王のプライベートエリア——後宮の最深部にある大浴場に向つて歩いてきた。今夜は北王妃と寢室を共に過ごす予定なのだが、彼女の使いから浴場に来て欲しいと連絡をうけたからだ。

「いったい、なんだろう……」

大浴場に向いながら、以前、初陣から帰還した際に、現在の王妃たちからその場所を受けたもてなしを思い出し顔が自然と赤くなつていく。後宮長エルダの指揮のもと、まだ王妃になる前の玲爛、リオネッセ、ゼシデリカ、香虞夜の四人に全身奉仕を受けたのだ。あの脳味噌が肉悦で沸騰しドロドロにとけてしまうような壮絶な経験を思い出し、フィンは自然と顔が赤らんでいった。そのためか思考がピンク色に染まっていく。

「香虞夜と二人でお風呂か……。くふふふつ。悪くないな」

二人でお互いの身体を洗いあい、そして——。

淫猥な妄想が次から次へと若い脳裏に浮かび鼻の下が伸びていく。

——今夜はたっぷり香虞夜とお風呂でイチャイチャしよう。

自然と足が速くなり脱衣所で手早く全裸になると飛び込むように大浴場に入ってしまった。昂^{たかぶ}りはじめた欲情を一刻も早く愛しい王妃にぶつきたい。湯煙の中、白い人影を見つけたと、もういてもたってもいられなくなり背中からガバツと抱きついた。

「かーぐやっ。お風呂に入る前に一回させてっ」

甘えた口調で素晴らしいながら背中から回した両手で胸を掴む。

もにゅだふんっ。

——あ、ありっ？

違和感に気づいた。揉み慣れた北王妃のバスト——丁度自分の掌に収まる程よい実りとはサイズが違う。一杯に開いた指の間から柔肉が溢れ、ずしっと重量感がある。

もにゅもにゅもにゅ、とその極上の盛り上がりをもう一度確かめてから、満面の笑みを浮かべていたため細めていた両目をおさるおさる開けていく。目の前にあるべきヤマトナデシコの黒髪が、見事な銀髪になっていた。——その銀髪がゆつくりと振り返る。

「あっ、ええっ!! エエエツエルダさんっ!!」

「フェラチオとは殿方のペニスに口で奉仕することです」

「あ、あの……どのようにすればよろしいのでしょうか？　出来れば手本を見せて頂きたいのですが」

香虞夜の言葉にフィン期待で顔が緩まないように注意した。手本となるとエルダがフェラチオをしてくれることになる。銀髪の貴婦人を伺うと彼女もこちらにチラリと視線を向けてきた。自分の気持ちなど聡明な彼女には完全に見透かされていることだろう。フィンはコホンと軽く咳払いして、このなりゆきを見守ることにした。

「わかりました香虞夜様。夜のことに関して直々に王妃様から依頼をされては後宮長を務めている者として断る理由がありません。それでは陛下、再度失礼いたします」

少年王が頷くのを見て、エルダと香虞夜が自分の股間の前にその美貌を並べる。

「まずは注意事項として一つ。陛下をお口にする際、歯を立てないようにはしてください。くれぐれも陛下を傷つけないようお願いいたします」

エルダの言葉に香虞夜が一瞬だけ顔を強張らせた。恐らくフィンを傷つける可能性があることを言われて緊張したのだろう。黒髪の王妃は真剣な表情をして、コクリ、と頷いた。そんな気負ったヤマトナデシコの緊張感を解かせるためにか、銀髪の貴婦人は優しく微笑んで説明を続ける。

「あとは口腔を駆使してペニスに奉仕するだけです。ペニス自体の反応や陛下の表情を伺

いながら、興が醒めないように注意してください。——それでは実際にやってみます」
 エルダは失礼いたします、と言うと男根の根元に片手を添えて、その美貌をブラウンへアが茂る股間に埋めてきた。「マツト洗い」から少し時間がたったため、多少勃ちが緩んだ肉先に軽くチュツとキスをする。艶っぽい唇を開き舌を出すと、肉先をペロリと舐めてから本格的に舌を絡めてきた。

へろへろむちゆつ。れろれろろつ。くちゆるつ、むちゆつ、れろろろろつ。

先端の小穴から亀頭、肉傘、肉胴と舐め回し、桃色の肉片はその下にある皺深い肉袋にまで及んだ。細やかに動く舌とねっとりとした唾液が執拗に絡んで離れない。最も敏感な性感帯で味わう後宮長の舌奉仕は強烈だった。勃ちが緩んでいた男根は一瞬でその先端を真上に向ける。舌が張りついている部分は熱い快感でビクビクと脈動し、他の部分がエルダの奉仕を渴望していた。肉棒がとろけるような牝舌との密着感に背筋がゾクゾクと快感に震え、目の前が肉悦の閃光でチカチカとピンク色に瞬く。

——やつぱり、エルダさんのテクニクは最高だ。そ、それに……。

しなやかな肉片がもたらす悦楽も然ることながら、あの後宮長が自ら舌を出し自分のペニス舐め回している光景にも激しく興奮してしまう。フィンの反応を伺うためにか、チラチラと上目遣いに視線を向けられるのもたまらない。

——こ、こんなの気持ち良すぎてすぐにイッチャうよお。

先ほどのマット洗いで長時間昂っていたこともある。少年王は両手を握り、全身を息ませて直前に迫った絶頂に備えた。——と、そんなとき。ついっ、と魅惑の舌がペニスから離れた。濃厚な快感から解放されてフィンはマットの上でふはあつと溜め息を漏らす。

「まずはこのような感じをお願いいたします」

「は、はいっ！」

真剣な表情で模範演技を見ていた香虞夜は勢い込んで頷くと、エルダと場所を換わりフィンの股間にその美貌を埋めてきた。

ぺろっ。ぺろぺろっ。

まるで子犬がミルクを舐めるように舌をチロチロと動かしてペニスを舐めはじめ。その懸命な行為から、自分に奉仕しようとする一途な気持ち伝わってくる。しかしエルダのテクニックを味わった直後では少々もの足りない。

香虞夜の行為を教官然として見守っていた後宮長も同じことを感じたのか、再度、フィンの股間に顔を埋めてきた。左右の足をそれぞれ香虞夜とエルダが跨ぐようにして、二人の美貌が自分のペニスの前に集結する。

「香虞夜様、ここはこのようにしたほうがよろしいかと思えます」

エルダの舌が右の肉傘の裏側をねっちりと舐め上げると、香虞夜がそれを参考に左側に舌を這わせる。先端の小穴を後宮長の舌尖が突つつくと、その舌に絡めるように北王妃の

舌が伸びてくる。いつしかフィンの男根を挟んで、マンツーマンのフェラチオ講座が始まった。

——わわっ。な、なんか、おちんちんが凄いことに、……ひひやあつっ！

技量に長けた聡明で熱心な教師と、溢れんばかりの向上心を持つ生徒による実技教習は、その練習台となつている男根に凄まじい肉悦をもたらした。

エルダの舌が裏側にべつたりと張り付くと、香虞夜の舌がその反対側を同じように舐め上げる。肉胴部分に浮き上がった血管をなぞるように銀髪の貴婦人が舌を這わすと、北王妃がほつれる黒髪を掻き上げながらそれに倣う。最も敏感な性感帯を二枚の舌で左右からねっちりと包み込まれる快感に、今にもペニスが発射しそうだ。フィンはグツと顎を引いて二枚の美しい舌に翻弄ほんろうされる己のペニスに視線を向けた。

——す、すぐくエッチな眺めだよお。

そのエロテックな光景を見ただけで果ててしまひそうだ。

西国の名彫刻家が腕を振るつて彫り上げたような端整な美貌と、美人国として名高いヤマトのプリンセスが己のペニスを挟んで唇を寄せ合い、大胆に舌を出しうごめかせている。香虞夜とエルダ、一人で佇んでいるだけで人心を一瞬で引き付けてしまうほどの美女二人が惜しげもなくその美貌を並べ、自ら己の男根をむしゃぶっている。その贅沢な光景を見続けるため凄まじい肉悦で仰け反りそうになる顎を必死で引きつけ続けた。

「それでは次は、お口の中で陛下に御奉仕いたしましょう」

後宮長はそういうと、どんな政治的難問にも的確な助言を紡ぎ出す唇を惜しげもなく開き、パクリと男根を咥え込んだ。

「くふああっ！」

思わず大きな喘ぎ声が漏れた。そしてとうとう顎を仰け反らせてしまう。吸われている。エルダが頬を凹ませるほど強くペニスを吸いながら頭を上下させ、柔らかな唇で肉胴をグポグポとしごきあげている。男根の裏側には舌が張り付き、唾液でぬめる口腔との密着感が壮絶な快感をもたらす。唾液のぬめりと舌のしなやかさ、そして密閉された口腔内の熱さが濃密に肉棒を包み込み、限界を耐える少年王を更なる高みに追い詰める。

「す、すごっ！ はくううっ、おちんちんがあっ吸い込まれるううっ！」

マットの上で背筋を反り返し、全身が肉悦でビクビクと痙攣していた。もうイキそうだが、知的な美貌を淫猥に歪ませて貪るように己の男根をしゃぶる貴婦人の口腔奉仕にこれ以上耐えられない。——と、そんな時。

ちゅぽん。

爆発寸前だったペニスが肉悦の坩堝から解放された。

少年王はガクンと全身から力を抜き、息を乱しながら己のペニスに視線を向けた。見慣れたハズの男根はいまにもはちきれそうなほど真っ赤に充血し、激しい口腔奉仕の余韻の

ためかほんわかと湯気がたっている。

「それでは香虞夜様、今のような要領でお願いいたします」

どうやらエルダは自分の限界を的確に見切り、計算して間を取っているようだ。練習台を見本を示すだけで使い物にならなくさせては意味がないからだろう。それだけにフィンはイキたくてもイケない、凄まじい官能の領域を彷徨うことになる。

「は、はいっ！ お手本、ありがとうございます！」

すでに男根を口にすることに慣れ始めた王妃にまるで躊躇はなかった。

透明感のある清楚な美貌を桜色に染め、上品な口元を大きく開きパクリとペニスを咥え込む。凛々しい眉を悩ましげに寄せて、小さな口を絞りこみくぼくぼと顔を上下させはじめた。エルダのような激しさはなかったが、暖かな口腔にねっとり包み込まれる感触はたまらなく気持ちいい。

爆発寸前の男根にとつて、不慣れなヤマトナデシコの口腔奉仕が最も限界を先延ばすことになった。結果的にイク直前の壮絶な快感を長く味わい続けることになる。

「このような感じでよいでしょうか」

一通りしゃぶり終えて、そう尋ねるヤマトナデシコに銀髪の貴婦人は微笑んだ。

「陛下の御様子をみれば答えはあきらかでしょう」

凄まじい快感から解放されてフィンは、はあはあ、と息を大きく乱していた。味わい続

けた快感が許容範囲を越え意識が朦朧もろうろうとしはじめている。そしてペニスはいまにも表面に浮いた血管がはちきれそうなほどパンパンに張り詰めていた。

「それでは最後は二人で、陛下に満足して頂きましょう」

後宮長はそういうと顔を斜めにして充血しきった肉先の半分をパクリと啜えた。その意図を察した北王妃も同じように顔を少し傾けて残りの半分を唇の中な包み込む。二人は僅かに顔を傾けて左右から龟头部分をすっぽり唇で包み込んだ。

ぱくちゅんっ。むちゅるる。くちゅるるるっ。

香虞夜とエルダが同時に肉先をねぶりはじめる。ペニスのサイズがそれほど大きくないため口を寄せた二人の唇が触れ合っている。まるで二人がキスしているようにさえ見えた。薄目を開けて巧みに舌を躍らせる後宮長と、うっとりとした瞳を閉じ一心にしゃぶりまわす北王妃。男根の根元に茂る陰毛の上で二人が指を重ねあっている。ブラウンヘアの茂みの中で絡みあう女の白い指がなんとも艶かしい。

——く、くはあっ、き、強烈すぎるっ！

エルダが頬を窄めながらちゅふるちゅふると頭を揺らめかせ、唇全面をへばりつかせるようにして龟头部分を吸い立てる。その強烈な快感に背筋が仰け反り女の子のような喘ぎ声が漏れてしまう。それだけでも限界なのに、残りの反面は情熱的なディープキスをするように愛妃が舌を絡めていた。二人の柔らかな唇に密閉された肉先が、とろとろの唾液と

しなやかな舌で責めつづけられて、脳裏が官能の閃光に満ちていく。無意識に全身を息ませて両手と両足をギュッと丸め込む。

「あつ、くはっ！ い、いっっちゃううつつ!! 二人のペロがあつくちびるがああつ！」

すでに限界寸前だったペニスはこの壮絶な快感に容易く臨界点たやすを突破した。限界まで張り詰めた男根の中を肉悦の激流が一気に駆け抜けていく。

びびゆっ！ びゆくくっ！ どぶどぶぶぶぶっ！

少年王が仰け反ると同時に重なり合っていた二人の唇の隙間から白濁の粘液がパッと噴出した。意識して唇を密着させていたわけではないためだろう。唇の内側に直撃しそれでも勢いを緩めない精液がドブドブと溢れだし、二人の美貌を汚していく。その淫猥な光景が益々射精の勢いを強めさせる。

香虞夜とエルダはフィンが完全に射精を終えるまで舌を踊らせ唇を重ね続けていた。

「はっ、ふはああつっ……」

少年王が仰け反らせていた背中をマットのうえにドサツと落とし、全身を脱力させてから二人はようやく男根を解放した。

香虞夜はまるでのぼせたようにぼーっとした表情をしており、そんな王妃をエルダは満足そうにみつめている。そのままツイッとヤマトナデシコの顎を掴むと、顔を寄せ頬を汚している精液をペロリと舐め取った。

思で男を引きずり込んでいるようだ。清楚な佇まいからは考えられない、淫猥で男好きする性器の構造をしている。根元まで埋め込まれたペニスの先端はプチプチとした無数の突起に擦られて壮絶な快感をもたらす——それはミミズ千匹やカズノコ天井と呼ばれる構造を両方兼ね備えた極上の膣内であった。バトルベルン国王となって大陸屈指の美女たちを四人も妃として迎えたが、これほどの名器は他にいない。

——くはああつ……。いつもと体位が違うから……感触も微妙に違う……。
 思えば香虞夜と正常位以外でセックスするのは初めてかもしれない。結合したまま液状ソープで濡れ光る女体を見上げる光景も新鮮だった。

「はああんっ、フィンさまがつ……。わ、わたしの一番奥まで……。と、届いてるっ」
 香虞夜が根元までペニスを己の身体に埋めると、全身の強張りを解きかくんと前屈みになって両手をついた。

「あつ、ふはあつ……。う、動きます……。ね……。」
 ヤマトナデシコがゆっくり腰を上下に振り始めた。目の前の薄い腹筋をあやしううねらせながら柳腰をぎこちなく躍らせる。

じゅぷぷつ。くちゅんっ。じゅぼじゅくくつ。

——いつものおしとやかな香虞夜もいいけど積極的な香虞夜もいいな。……。とうか、普段のおしとやかな香虞夜とのギャップがたまらないかも。

目の前であやしく揺れる乳房を片手で掴み、北王妃の女体に耽溺する。液状ソープでぬめるバストは彼女自身の動きのために心地良く掌の中で踊り男を飽きさせない。

「はひゃんっ！」

香虞夜が可愛らしい裏声を発した直後、ペニスをねっとり包み込んでいた無数の膣壁たちがギュッと引き絞られた。その強烈な締め付けによつて迸ほとばしった快感に全身がビクッと張り、掴んでいた乳房をむぎゅつと強く握り締めてしまう。

「あつ、だ、だめえっ……エ、エルダさまあ……」

フィンの位置からは見えないが、後宮長が北王妃の股間で何やら悪戯しているらしい。余程気持ち良いようで細い女体がひくんひくんと突発的に痙攣している。

「エルダさんに……何をされてるの？」

純粹な好奇心からの問いだった。しかし、その直後、再度膣壁がギュッと引き絞られる。「あつ、あの……あつくはああつ……」

顔を真っ赤にして身体を繋げたまま恥じらう香虞夜の姿に、フィンは鼻息を荒くする。無意識に発したセリフが黒髪の王妃を責める効果があることを知り、今度は意識して質問を投げかけた。

「ねえ、香虞夜。はつきり言つてごらん。エルダさんになにを——はくうっ」

恥ずかしい答えを強要しようとするので締め付けが更に激しくなる。肉棒を包み込む膣壁

たちが反発するようにペニスを圧迫し、とてつもない快感で続く言葉を喘ぎ声に変えさせる。

「あ、あの……はあんっ……エルダ様が……わ、わたしの……」

しかし健気なヤマトナデシコは、羞恥心を乗り越えて夫の求めに応じようとしていた。

「……はああんっ、お、おしり……ああっ……おしりです……。エルダ様の舌が……わ、わたしの……ああっ……お尻を……くはああっんっ、な、中まで入って……」

フィンとは自分と身体を繋げたまま顔を真っ赤にしてそう告白する愛妃の姿に魅入ってしまった。お尻というのはどうやら肛門のことらしい。そう察すると同時にエルダのアナル舐めの快感を思い出しゴクリと生唾を飲み込んだ。

「おわっ！」

香虞夜の腰からくるりとエルダの手が前に伸びてきた。泡立つ漆黒の茂りの中に白い指が入っていき自分と結合している牝華の頂点部分を摘む。

「はひゃんっ！」

クリトリスまで指の腹で擦られてヤマトナデシコが大きく仰け反った。なんとか続けた腰の上下運動が、その強烈すぎる責めから逃れようと左右に振られる。いままでと違う角度とリズムで結合した性器が擦れあう。その快感にフィンの肉先からは先走りの肉汁が溢れだし、香虞夜が分泌する愛液と蜜壺の中で混じり合う。二人の結合部分から牝牝の

濃密な匂いを立ち昇らせた。

「はくふふあつ、だ、だめつ、エルダさまつ、あつ、ああつフィンさまあつっ！」

前後の急所を性技に巧みな後宮長に責め立てられて、黒髪の王妃は少年王の腰の上で身悶える。全身に絡みついたままの液状ソーブは汗と混じって飛び散りながらも、ヤマトナデシコの白い女体をつやつやと照り光らせていた。そのあまりに官能的な光景とペニスを襲う悦楽にフィンはもう我慢ができなくなる。

一方的に奉仕されるのも良かったが、昂りきつた獣欲が激しい爆発を求めている。

「か、かぐやああつ！」

自分の上で悩ましげに身体を振よじっている王妃の姿が理性を真っ白に灼ききつた。片手で強く乳房を握りがむしやらに腰を突き上げる。

ばちゅんっ！ ばちゅくちゅパンパンパンっ！

その激しい突入に香虞夜は掴まれていない乳房を激しく弾ませながら顎を仰け反らせた。攻守の入れ替わった二人は深く一つになったまま、全身を襲う快感に身を委ね夫婦の営みに没頭する。愛妃の最深部をコツコツと突き上げる男根はその悦楽に限界まで膨張し、いつ爆発してもおかしくない。ぬるぬるとヌメリ絡み続ける牝褻たちの煽動は激しくなる一方で一瞬たりともフィンのペニスを極限の肉悦から解放しなかった。

「かぐやっ、かぐやああつ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>